青春に何をのこすか

畑山 博

畑山　博（はたやまひろし）
1935年　東京生まれ
1972年　「いつか汽笛を鳴らして」で第67回芥川賞
受賞（『はにわの子たち』収録）

青春に何をのこすか
一九七五年四月二〇日初版発行

著　者　畑山　博　©1975
発行者　大和岩雄
発行所　大和書房
東京都文京区関口一―三三
郵便番号　一一二
電話（二〇三）四五一一
振替東京六四二二七

印刷所　信毎書籍印刷
製本所　誠幸堂
落丁本・乱丁本はお取替えします
0012-000820-4406

プロローグ・拒否からの出発

オーケストラとマッチ棒

その西ドイツからきた有名指揮者は、羽田から大阪に向かう飛行機の出発時刻を、まったく個人的なわがままから十分間も遅らせた。十分間それが狂うと、他の客や空港で働らく者たちが、どんな迷惑をこうむるかということも考えずに。ただ、途中の骨とう屋で見かけた壺をもっとよく眺めたいと言って車を下りてしまったのだ。

そうして遅れて着いた演奏会場。舞台の袖に立ったその指揮者。いばって付き人にマッチの火をつけさせてみる。

「だめだ、こりゃ。空気がかすかに動いてるじゃないか。換気扇止めろ。でないと演奏しないで帰っちゃうぞ（ここドイツゴ！）」

冗談じゃない。お客はみんな呼吸を止めてかしこまっておれとでも言うのか。だいたい二千人も人が集まっていれば、それだけでホールの空気は動く。二千人もの者たちが息をしていれば、それだけだって空気の入れ替えは必要なのだ。

それなのに、とうとう換気扇は止められた。暑い暑い最中のことである。おかげで観客は汗だくだく。勇気ある観客が一人だけ、ふんぜんとして席を立った。

性格俳優と言われるあるスターは、一本の帯ドラマに出演するのに、一億円という契約金を要求した。同じころ放送局の大道具係が月給七万。同じドラマに出演する脇役たちの平均月収十万というのにだ。

そうしてその俳優、その金で、補給なしでも世界一周の出来る大型ヨットを買って乗りまわし、自分が手をつけた自宅のお手伝いさんをテレビドラマに出演させろとだだをこね、真面目なスタッフたちを困らせた。なにしろそのお手伝いの女、どうしようもないノータリンだったのだ。

ところで君の月給は今いくらだ？　家賃はいくら？　きのう観た映画の入場料はいくら？　そうか。九万円のうち三万円。映画の方は二人で観たから四千円。なんとまあべらぼうな値段だと思わないか。君は、君らの払ったその金で、有名俳優殿やら有名指揮者殿が、とんでもないぜいたくをしているのを、黙って見すごしていられるか。

此为试读，需要完整PDF请访问：www.ertongbook.c

君の暮らしのレベルと、彼らとの差が、そんなに大きくなければならないほど、君は、自分を価値の低い人間だと思うか。

定期の飛行機便を十分間も遅らせた指揮者。一億円でヨットを乗りまわす俳優。連中のおごりの基盤っていったい何だろう。

あるいは連中は、演奏家として役者として、君よりは多少キャリアがあるかもしれない。が、しかし、そんなものがなんだ。音楽なんていうものは、エアコンディショニングを止められて、汗だくになってまで聴かなければならないものだろうか。そんなストイックなものだろうか。

例えば、いつか大昔、ドイツ国はベートーベン氏が作曲したというシンフォニーを聞いて楽しむだけだったら、もっと謙虚な、質素な、君と同じアパートにでもいそうな連中が作っている市民楽団の演奏の方がはるかに気分がいい。

一億円の契約金をとる俳優と、公民館で芝居をしているアマチュア劇団の間に一億円分もの技術の違いはありはしない。なんともえらく世襲的な芸能界の中で、たまたま他人よりごますりがうまく、運がよかっただけの男がスターになる。そんな奴らを偶像化して、おさい銭上げる義理なんかわれわれにあるのだろうか。

このスターどもを引きずり下ろせ

ところで、あるときこんなことをお言いなすった新劇演出家のセンセがいた。

「われわれの芝居を分かってくれない連中は認めない。われわれの芝居をけなす者は抹殺する」

金をとらないで見せる芝居ならばなるほど分かる。けれどもだ。一人分二千円からの入場料をとっておいて、面白くないと言う者は出て行け金は返さねえぞというのは、何とまあ失礼な言い草なのだろう。

芝居が、観客たちに、ひまつぶしの時間を売るのでなくて、もし何がしかのカタルシスを提供する目的のものなのだったら、とうぜん料金は返すべきである。それを、文句つける者は金だけ置いて出て行けというのは、連中が何やら権威みたいなものを売ろうとしているからではないのか。

そうして困ったことに世の中には、いつもそんなおどしに屈服する卑屈な権威マニアが混じっていて、新聞に名前が出ていたものは何でもかんでもいいものだと叫ぶ。叫ぶことによって、自分もその名前の万分の一のおすそ分けにあずかったような気分になろうとする。

換気扇を止めて、観客が汗だくになって聞かなければ演奏できないなどという傲慢な音楽

家を育ててしまったのは誰だ。一億円ギャラをくれなければドラマに出演してやらないなどという思い上がったタレントを育ててしまったのは誰だ。君らと同じオフィスや工場やキャンパスにいる、絵に描いたようなお人好したちではないか。他人が、自分に比べてべらぼうに多い財力、権力をもっているということに、怒りを感じなくなってしまった、クラゲのような大衆ではないか。

君は、そういう衆愚の一人として登録されることに、がまん出来るだろうか。

一億円のギャラをとるタレントと君自身のギターとの間に、天と地ほどの差はありはしない。それは自己満足的にそう思うのではなく、客観的にみたってそうだ。賢い人間はみなそのことを知っている。考え方の大事なポイントは、ギャラを多くとる連中の技術と君らのそれを並べてくらべてみることではなく、その二つが、初めから対立するものとして存在しているのだということなのだ。

例えば、君が今、どこかで、何のたれべえなどという男の作った映画を観るとする。それは、酒やお喋りや食事と同じ楽しみとしてはまあいいだろう。いいけれどしかし、もう一つ別の角度から見れば、君は、そのとき、自分のオリジナルなイメージを、オリジナルな思考を、自分のノートに書きとめることだって出来たかもしれない時間を、費してしまったのだとも言えるのだ。

君は君の人生の貴重な時間を、その何のたれべえ殿のために侵略されたのだ。一億円でヨットを乗りまわす生意気な奴らのサロン的饒舌を押しつけられたのだ。

それはエゴイズムかもしれないけれど、自分を人生劇の主役に置きたいという願いは誰にもある。あっていい。帝王病にかかった有名芸術家や芸能屋どものために、時間を侵略されるなどつまらないことではないか。権威という名の傲慢を拒否し、権威者の祭りであるもろもろのセレモニーを無視することで、連中のわがままがきかないようにストップかけてやるべきではないか。

例えば誰の紹介もない若者が、安くてうまい放送局の食堂でちょっとランチでも食べようと思って入って行ったとする。そのとき入口でどんな扱いを受けるか。無能なくせにコネで入って高給とってる受付女や、巡査まがいの制服を着た頭の悪い番犬どもに、どんな不快な扱いをうけるか。ちょっとでいいから体験してくるといい。それだけでもう君は、明日から、テレビなんぞ誰が観てやるかという気になってしまうはずである。

君は、他人の作ったそれほど冴えてもいない歌など歌うことを恥じ、君のオリジナルを歌うべきではないか。君を参加させてくれない連中がやってる見世物なんか無視して、君自身の想像力を働らかす行為の中に、フラストレーションの解消を求めるべきではないか。

そうして君は、君のオリジナリティを刺戟し、発芽を促す肥料として役立つごくわずかな

ものだけを探し出して、鑑賞すればいい。君自身のフィルターによって選り分け、利用すればいい。どうしようもなく下らなく饒舌すぎるこのお国の情報洪水の中にも、ときどき英知を感じさせてくれるものが混じっていることはある。そんな小さな小さな可能性まで否定し去るつもりはないのである。

目次

プロローグ・拒否からの出発……1
オーケストラとマッチ棒
このスターどもを引きずり下ろせ

第一章　日本列島の形をした棺桶

すえ膳ニストたちの島……15
日本列島総あわ踊り
形骸としての祭り
強姦は革命・和姦は屈辱

ふたたびくる戦争を前に……25
気のいいはつかねずみ嬢
涙ぽろぽろ旅立ちの歌

同胞という名の幻……34
ゲバ棒とポルノ
キャンパスにうずまく不満
ユートピアは一つか

此为试读，需要完整PDF请访问：www.ertongbook.c

一億人の阿Q……47
紙芝居「阿Q正伝」
学生たちの敵・正義の敵
墓場の中から
ミクロコスモスとしての個の確立

第二章　個の自覚・吹き荒れた「創造」の嵐

ファッションのナンセンス……69
ファッションの生理学
骨のネックレスと山陰の娘
猫が作曲したソナタ……78
「へそのお」の行方
ドレミハの罐詰
前衛ゲイジツ罵倒術……86
このガラクタが彫刻か
過ぎた時間はおとなしい
はるばるヨーロッパからやってきたバカ
王様の糞と乞食の涙

第三章　一つの時代が終った

イージーライダーの弱点……101
命中しなかった特攻機
甘えの醜さ
砂漠の中の船

かくて山師だけが残った……111
ゼロゼロ号のナンセンス
何がエロスだベテン師め

しらけを言うのはもう古い……118
透明人間たちの演じる猿芝居
試行錯誤のくり返しの中に何がある
ブルーフィルムよお前もか
知的な若者の条件

ことばのルネッサンス……134
ゴリラの嘆き
本当に言葉の死滅した世界とは何か

ビートルズの葬式……144
あるアンティクの店で
なぜスターが誕生するか
ビートルズの妻のナンセンス
次の時代にも耐え得る価値は何か

第四章　しかもクリエイティブに生きるとは

冒険の可能性……159
あのみすぼらしい月面旅行
パッケージ化された冒険
何に向かってパトスを燃やすか

この身のうちにある鋼鉄の刃……168
オリンピックのナンセンス
ロイヤルボックスをこけにした勇者

放浪か定着か……176
フーテン帝国の崩壊
野たれ死にした新宿文化
淋しき自我のそのすみか

シケイロスの世界……188
湖上の美しき都
本当の前衛とは何か
やがてくる第五間氷期に
君のピラミッド……197
ねずみかコーモリ蟻か
いつか歴史の終りの日に
ふたたび空白の地図が
ビード・スカルミンの創造
後記……212

装幀　辰巳四郎

第一章　日本列島の形をした棺桶

此为试读，需要完整PDF请访问：www.ertongbook.c